

University Academic Repository

The role of the noun phrase and teaching of the
existence sentence pattern guidance

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Lin, Lin メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/202

存在文型指導における名詞句の役割

一文の発話前提と「は」「が」との関連を中心に—

The role of the noun phrase
and teaching of the existence sentence pattern guidance

林 林

Lin Lin

<概要>

初級日本語教育における文型指導は、文の構造理解と生成能力の獲得のため、語彙教育と並んで中心的な位置を占めるものである。従来、「～に(は)～がある/いる」と「～は～にある/いる」という文型が、いわゆる存在文型のペアとして定着している。しかし、それを導入する際、ほとんどの教科書では単に動詞の「存在」と「所在」という意味合いに着眼点を置き、そして文型間に無関係の語彙を代入して練習するに止まるといえよう。文型の意味づけと、「は」、「が」または「に」を含む名詞句とのかかわり、また文型の提出順序と名詞句との関連性によるアプローチが不十分であり、単なる動詞からの捉えでは、初級学習者の習得には明らかに十分ではないと考えられる。

本稿では、主として文の発話前提と名詞句の役割との関係について、変形文法の記述から議論することによって、この二つの文型の意味づけにおける名詞句の関与を考察する。これを踏まえて、文型導入際の文型の提出順序を提案し、教室現場の文型指導に値する手口を探ることを試みたい。

<キーワード>

存在文型、名詞句、句構造、「かき混ぜ」変形、「が」文と「は」文、基底の格、前提、Pの表示とLの表示

1. はじめに

文型 (sentence pattern) とは文法を文の形で提示したものであり、日本語教育では一般に述語と補語との各関係のあり方によって分類、配列した構造文型を指す。日本語教育における文型指導は、語彙教育と並んで、文の構造理解と文の生成能力の獲得をめざして行われ、特に初級教育では中心的な位置を占めるものである¹⁾。

従来、初級日本語教育においては、「～に(は)～がある/いる」と「～は～にある/いる」という文型が、いわゆる存在文型のペアとして定着している。この二つの文型を導入する

際、その名づけのように、単に「ある」と「いる」という動詞の意味合いでとらえ、往々にして互いに関連性のない語彙を代入するだけで終わり²⁾、助詞「は」「が」と文型の意味づけ、また文型の提出順序との関連性からのアプローチが充分だとは言い難い。

目下、初級日本語教育におけるよく使われている教材³⁾の例を見ておく。

『新日本語の基礎Ⅰ』の第10課は、次の通りである。

- (1) a. 事務所に田中さんがいます。
b. ロビーにテレビがあります。
c. ラオさんは部屋にいます。
d. 本は机の上にあります。

そして、『みんなの日本語初級Ⅰ』の第10課では、下記のようなになる。

- (2) a. あそこに佐藤さんがいます。
b. 机の上に写真があります。
c. 家族はニューヨークにいます。
d. 東京ディズニーランドは千葉県にあります。

存在表現として文型を提出する時、「～に～がある／いる」と「～は～にある／いる」とは、交換できるものとして扱われている。しかし、上記のものを含むほとんどの初級教材において、存在表現を初めて取り上げる場合、同じく存在の表現である(3a)～(3d)のような「～(は)～はある／いる」と「～が～にある／いる」がほとんどないことは周知の事実であろう。

- (3) a. 事務所に田中さんはいます。
b. 机の上に写真はあります。
c. ラオさんが部屋にいます。
d. 東京ディズニーランドが千葉県にあります。

また、教師用のマニュアルとして『新日本語の基礎Ⅰ』⁴⁾では、

「～に～が」文型と「～は～に」文型の違いは、「～に～が」文型は「あるかないかの存在」をいう場合に、「～は～に」文型は「どこにあるかの所在」をいう場合に主に用いられる。

とあるが、着眼点は主に「存在」と「所在」にあり、「は」と「が」を含む名詞句と、「に」を含む名詞句との関連、すなわち名詞句と動詞の意味との関係による言及はほとんどみられない。それに、(1a)～(1d)でも(2a)～(2d)でも前後の例文はそれぞれ互いに関連性も持たれていない。そこで、なぜ(1)と(2)の意味が(3)と違うのか、なぜ「～は～にある／いる」が「～に～がある／いる」の先におくと違和感が出るのかは、無関係の語彙の代入だけでは分らないままで、同じ動詞や同じ存在の表現なのに、成立する場合としない場合があって、そして「は」と「が」が置き換えられないことは、初級学習者の理解に支障をきたすのである。教師がその説明を求められることになるが、単に「存在」と「所在」という動詞の意味

合いから文型の意味づけまたはその違いを捉えるのは、明らかに不足していることであると考えられる⁵⁾。

本稿では、「～に～がある／いる」と「～は～にある／いる」を導入する時、主に文の発話前提と名詞句の役割との関係に着眼し、変形文法の記述から議論することによって、この二つの文型の意味づけにおける名詞句の役割を考察する。さらに、文型の提出順序を考えていく。そして、それらを文型指導など教室活動に役立てることを目的とする。

2. 文型の句構造

具体的な議論に先立って、「～に～がある／いる」と「～は～にある／いる」の句構造を見ておく。

上掲した(1)と(2)における文の主語名詞(存在者/物)を N_1 、位置補語(存在場所)を N_2 、動詞をVで示すと、(1)と(2)の例文すべてはそれぞれ、

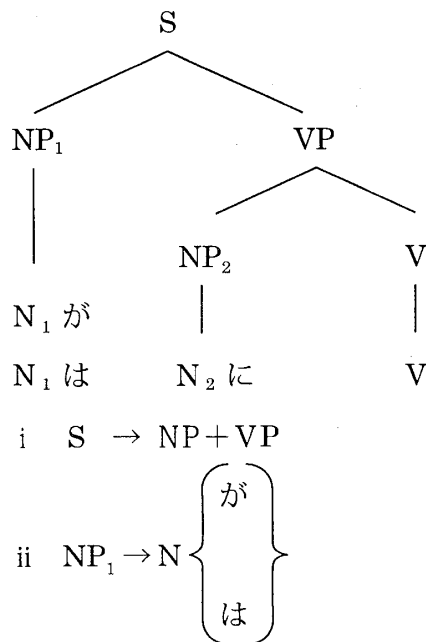
(i) 「 N_2 に N_1 がV」

(ii) 「 N_1 は N_2 にV」

のいずれかの文型にあたる。後述のように、(i)構造の(1a)、(1b)と(2a)、(2b)はいずれも、文型(iii)が「かき混ぜ」変形⁶⁾を経て、「 N_2 に」が文頭に移動した形で、文型(iii)と同じ深層構造をもつと見なしておく⁷⁾。(ii)も(iii)が主題化変形したものである。

(iii) 「 N_1 が N_2 にV」

(iii)では、「は」と「が」、そして「に」によって繋がった名詞句をNPにする。「 N_2 に」は動詞句VPの構成素 NP_2 として、VPに含まれる⁸⁾。そこで、主題をあらわす「は」と主語の「が」を持つ名詞句を NP_1 にすると、「 N_1 が N_2 にV」と「 N_1 は N_2 にV」という文Sの句構造は以下の規則に合うものである。



上記の規則より、文型(ii)と文型(iii)とは、同じ $S \rightarrow NP VP$ にあるものの、意味的な区別は NP_1 という名詞句の助詞の違いによることがわかった。

この形式構造は中国語との対照で明らかになると思われる。中国語では存在表現をする場合、例えば、(1d)は

「书在桌子上面。」

と言い、(2b)は

「桌子上面有照片。」

といったようにそれぞれ違った動詞が用いられる。「所在」の意味では「在」、「存在」「所有」という意味では「有」という別々の動詞が使われ、はっきりとした意味づけの役割分担がある。上掲の句構造と同じ符号で示すならば、存在動詞が「在」の場合は、

「 $N_1 + V_1 + N_2$ 」、

存在動詞が「有」の場合は、

「 $N_2 + V_2 + N_1$ 」

という文型となるように、中国語では、「有」と「在」というVの違いが、その他の成分の位置変化を引き起こすのであり、存在文型の意味づけは動詞によってきめられているわけである。

それに対し、日本語では、ひとまとめにしてすべて「ある／いる」を用い、つまりVには形式的に変化がなく、 NP_1 に「が」を入れる場合は、 NP_2 つまり「 N_2 に」が文頭に移動するという形になる。このように、存在表現が形式的には二つの文型となるようになり、存在動詞についていうと、基本的には「ある／いる」には(a)所在(b)存在所有、という二つの意味区分がなされている。この点に限ってみれば、日本語では、「が」と「は」の名詞句と、「に」の名詞句との位置変化が、Vが「ある／いる」である文型の意味づけにかなりかかっていることが示されている⁹⁾。つまり、名詞句の組み合わせの如何は存在文型の意味づけに大いに関与しているといえよう¹⁰⁾。

以下、議論の便宜上、本稿では存在者／物又は動作主を「が」で表わす名詞句のある文を $S_1 \rightarrow NP$ (が)VPとし(以下、「が」文)、存在者／物又は動作主に「は」がつく文を $S_2 \rightarrow NP$ (は)VP(以下、「は」文)とする¹¹⁾。議論の対象も S_1 と S_2 に留める。

そこで、 S_1 と S_2 とは、句構造の形式において、助詞がその相違の標識になると思われる。

3. 「が」、「は」文の前提

日本語において、1つの文を発話するとき、その発話が適切であるためにあらかじめ成り立っていないといけない条件が要求されることがある。そのような条件を前提(Presupposition)と言う。では、発話の展開において「が」文と「は」文がその前提とどのようなかわりにあるのか、例を2つ見ておく。

(4) 昔昔、山の中におじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんとおばあさんはうちでかさを作っていました。あしたはお正月です。新しい年がはじまります。でも、おじいさんとおばあさんはお金がなかったから、お正月のおもちもありませんでした。二人はかさを売って、おもちを買うつもりでした。

おじいさんはかさを持って、町に売りに行きました。…¹²⁾

(5) 北の国の年をとった漁師が冬に海を見たいと5人の子どもに頼む。上の4人の息子は、いろいろな方法で海を見せようとするが、失敗した。一番下の娘は、凍った海を前にして…。¹³⁾

(4) は普通の物語文の初めの一段であり、(5) はあらすじの紹介である。日本語の発話においてよく見られる展開である。

「が」文と「は」文の担い手である「が」と「は」の使い分けについては、さまざまな先行研究がある。従来の研究を総合すれば、「は」が主題を表すとき、その文は判断文で、主語から述語にかけて「旧情報から新情報」という情報の流れをもつ有題文となる。そして「が」が中立叙述を表すとき、その文は現象文で、「文全体が新情報」の無題文となる。日本語の典型的な表現では文は上記のいずれかに属するが¹⁴⁾、ここで詳しくふれる余裕はないので、この面の議論をしないことにする。

(4)、(5) の「が」文はともに新情報を取り上げる形で、その展開の条件として必ずどこかに前提が置かれることであろう。(4) では、「昔昔」は話全体の予告として、また「が」文の前提句として、役割を兼ねるのであり、(5) の「北の国の年をとった漁師が冬に海を見たいと5人の子どもに頼む」では、「北の国の」「冬に」は前提句として文中に埋め込まれていると考えられる。

即ち、(4) では、時名詞句がその前提となる。その後の主語名詞句は、動作主の場合は「が」を取り、他の名詞句はそれぞれの格関係によって、「に」「を」などの助詞を取って、併せて新情報をあらわす。

一方、「は」文の方はいずれも前の文を前提として、いわゆる既出の事項を取り出し、展開していく。つまり、既出の名詞句は再び提示される場合は「が」ではなく、「は」を取り、主題に昇格することになる。例えば(5) では、「上の4人の息子は」と「一番下の娘は」という名詞句は、いずれも前文の「5人の子ども」という既出事項をもとに、再提示として展開されることになる。

以上のことから、「が」文も「は」文も、例外なく、何らかの前提にもとづいて発話が行われることが示される。ただし、それぞれの前提条件はやや違う様相を呈している。以下、「が」文と「は」文における前提の具体的な様相を考察しながら、文型(i)(ii)とのかかわりを考えていく。

3. 1. 「が」文の前提

「が」文の前提を考える前に、例文(1a)と(4)をとりあげておく。

(6) a. 事務所に田中さんがいます。

(7) a. 昔昔、山の中におじいさんとおばあさんが住んでいました。

先にすこし触れたように、(6a)(7a)は、形式上、「かきまぜ変形」(Scrambling)から捉えることができる。この規則は、同一節内にある主要構成素の位置を転換する規則であり、日本語では、述語を除く主要構成素に適用され、いわゆる語順転換規則とされる。これにより、(6a)、(7a)は以下のように変えられる。

(6) b. 田中さんが事務所にいます。

(7) b. 昔昔、おじいさんとおばあさんが山の中に住んでいました。

c. 山の中に昔昔、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

d. 山の中におじいさんとおばあさんが昔昔、住んでいました。

e. おじいさんとおばあさんが昔昔、山の中に住んでいました。

上記の例に見られるとおり、発話の条件が設定されていない場合、「かきまぜ変形」によれば、基本的に日本語では、単文中の動詞以外の要素は基本的にどんな順序であらわれてもよいとされる。

ところが、或る条件の下で上掲した例を考えると、意味的にはまったく違いがないとはいえない。以下は発話前提に対しての処理によると想定して、格関係と、表示Pと表示Lから考察していく。

3. 1. 1. 格関係から

句構造における格の文法関係の規則による解決方法としては、「基底の格」¹⁵⁾から捉えることが考えられる。

日本語では、文中における名詞句の役割は、一貫して、格助詞によって表わされる。しかし、「すべての格が統語上同じ重要性を持っているということではない。…(中略)統語上の重要性によって格の順位を定めることが、言語一般に見られる種々の現象の説明に役立つ。格の順位は、標準理論の深層構造をもとにして決定される格ばかりではなく、派生された格にも適用されるものであった。」(井上・1976)¹⁶⁾

ここで問題になるのは、深層構造をもとにして決定された文法関係だけでは意味解釈が決定できない場合があることである。これに対し、井上は述語の意味によって決定される格を「基底の格」と呼んで、このような文法関係を表わす格と区別して、まず、「名詞句の文中での役割は、述語の種類によって決まる」(井上・1976)¹⁷⁾と指摘した。つまり、このような名詞句の役割を「基底の格」と考えるのである。

これによると、一般的に言って、述語の種類にかかわらず広く分布する時と場所を表わす名詞句は、その意味での「基底の格」を表わすとは言いがたい。ここで井上の例を援用して

説明するならば、例文(8)では、時を表わす「昨日」「5時ごろに」、場所を表わす「公会堂で」といったような名詞句が、意味の脈絡が保たれている限りは、種々の動詞と共に起るとされる。

(8) 昨日、5時ごろに、公会堂で、ジョンが音楽会の準備をしていた。

他に、一時的な状態を表わす形容詞や形容動詞も、このような時や場所の限定を受けた文脈で使われる。

(9) 昨夜、12時半ごろには、横浜には、空が薄暗かった。

このようなことから、時や場所を表わす名詞句や、それらの名詞句+助詞が、文全体の時や場所を設定する役目を果たしている場合には、述語の持つ意味によって決定される格でないことがわかる。

したがって、例文(6a)と(7a)の「事務所に」「昔々」「山の中に」を、「基底の格」と認めがたいものとして除外してもいいと考えられる。この場合は、これらの名詞句はすなわち「が」文の前提となり、「は」をつけて主題化したものと同じ意味合いになると見てもいいと思われる。これは後述するように、いわゆる単文内部からの主題化変形でもあるといえよう。

一方、述語の中には、場所を表わす名詞句を、必ず伴わなければならないものもある¹⁸⁾。例えば、

(10) 兄が東京にいます。

(11) 秘書が机の上に原稿を置いた。

などは名詞句の格は位置格として、基底の格に入る。これらは、「かき混ぜ」変形によって、次のようになってもいいであろう。

(10) a. 東京に兄がいます。

(11) a. 机の上に秘書が原稿を置いた。

ただし、(10a)の「東京に」と(11a)の「机の上に」はここでは基底の格の点からいうと、文全体を設定する役目はない。言い換えれば、このような位置格は文頭に移動しながらも、前提の役割がかなりの程度弱いといえる。このような基底の格は、文全体の場所を設定する役目がないので、同一の文では主題化できるとは言いがたい。主題化すれば、意味の変化も伴われることになると思われる。

このように、「かき混ぜ」変形の途中において、意味関係が変わらないまま移動する場合もあれば、意味関係の変化を伴うこともありうるので、「が」文において、文頭の居場所を表わす名詞句は2つの様相を呈していることが示されている。

したがって、文型(i)の「N₂に」は意味解釈上、2通りの可能性がでてきた。そこで、次はPの表示とLの表示からさらに考えていく。

3. 1. 2. Pの表示とLの表示から

つづいて、Pの表示とLの表示から例(1a)を取り上げて「かき混ぜ」と「が」文の前提

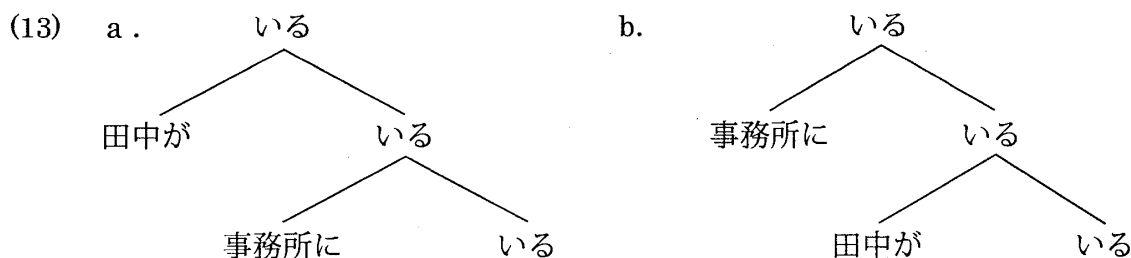
を考えてみる。

- (12) a. 田中が事務所にいる。
- b. 事務所に田中がいる。

前述したように、(12b)は移動変形によってできたものだとされる。このような変形による「N₂にN₁がV」は、基本的には「N₁がN₂にV」と意味が同じようである。

ところが、3.1.1で見たように一つの文において構成素が表れる情報、およびその構造を表す方法を併せて考えると、なお意味的な違いが見られる。これについて、郡司(2002)が言語を音韻的な表示Pと意味的な表示Lのような2つの表示の対として考える¹⁹⁾。郡司では「移動」をPの表示における位置の変化ととらえるかLの表示における位置の変化ととらえるかで事情はかなり変わってくる。」(郡司・2002)²⁰⁾と述べているように、例(12)をLの表示からは、(13)のような2通りの異なる構造を立てることができる。

このような階層的構造の判定基準からは、(12a)では「事務所」と「いる」が結びついて、動詞句(verb phrase)とよばれている構成素を作っている。(13b)では「田中」と「いる」が結びついて構成素を作っているが、このような構成素に対しては特に名前はない。



郡司(2002)はかき混ぜ現象を目的語が主語に先行する場合のC-統御する²¹⁾位置から議論をして、論理的には4つの可能性を提出した。(<X,Y>はXがYをC-統御することをあらわす。X>YはXがYに先行するということである²²⁾。それを参考に、(12)を(14)のような4タイプとすることができる。

(14)

		L	
		<田中が、事務所に>	<事務所に、田中が>
P	田中が>事務所に	タイプA	タイプB
	事務所に>田中が	タイプC	タイプD

(14)によるとタイプCの場合では、(12b)のLにおける表示は(13a)の構造となる。一方、タイプDは、音の列においても意味的な関係においても位置名詞句の方が優位になる場合で、(13b)のような表示をもつ。

また、この4タイプで前掲した例を見ると、タイプDの場合では、前掲した例(8)と(9)の「昨日」「5時ごろに」「公会堂で」「昨夜」「12時半ごろには」「横浜には」などの位置名詞句が「基底の格」から除外して、主題化になる。

これによって、例(4)の「昔昔、山の中におじいさんとおばあさんが住んでいました」は

タイプDに属し、「昔昔」はもちろん、「昔昔、山の中に」も文の前提になれる。そして、例(5)は、タイプBの場合はその前提がゼロ範疇となり、「 ϕ 、北の国の年をとった漁師が冬に海を見たいと5人の子どもに頼む」と記述していいと考えられる。

一方、例(10a)と(11a)における「東京に」「机の上に」という名詞句が基底の格に入れるので、文頭に移動しても深層構造はタイプCに相当する。

以上、「が」文の前提に対する考察から、文頭に置かれる時名詞句を除き、その前提のところには主題の振る舞いをする位置名詞句もあれば、その振る舞いのない位置名詞句もあることがわかった。ただし、単文だけでは、名詞句が文頭に移動する場合、「基底の格」でなくなるのか、或いは、単なる程度の差に留まるかは依然として判断に難しい。これまで見てきた例のほとんどは、「は」という主題化の標識がついておらず、その識別は文脈に委ねるところが大きい。それにしても、「が」文の前提は主題に昇格するか否かにもかかわらず、その文の内部に置かれることを指摘したい。

これまでの議論をまとめてみると、文型(i)の表層形式に、二つの深層構造が対応しているということがわかった。それに、「が」文の前提がその文の内部から生成されると言ってもよからう。

3.2. 「は」文の前提

主題文について、まずは、統語上の一般性として説明しようとの試みがある。これは、主題化により「は」が付加された時に、削除される格助詞のあることに着目し、これと関係詞化を関連づけようとしたものである(久野、1973)。「が」、「を」、および位置格の「に」はこの種の格助詞で、「は」が後に来ると削除される²³⁾。

- (15) 彼が~~は~~、もう出かけた。
 (16) 本を~~は~~、もう買った。
 (17) a. この大学~~は~~は、蔵書が多い。
 b. この大学には、蔵書が多い。

このように、主語と直接目的語に「は」がつけられると、格助詞の削除が義務的にかかる。位置格を表わす「に」の場合は、(17a)、(17b)が示すようにこの変形が任意に行われる。間接目的語(例文(18))、およびその他の格((19)、(20))は削除されないで、「は」の前に残る。

- (18) 彼には、もう話した。
 (19) 東京では、連日晴天が続いている。
 (20) 東京からは、便りが来た。

これによって、前節で取り上げた「が」文における前提となる名詞句、とくにタイプDの場合はこのような「は」による主題化変形も一般化のように見える。たとえば、例(8)、例(12b)の非基底の格名詞句に「は」をつけても、基本的な意味合いが変わっていない。

- (8)¹ 昨日は、ジョンが音楽会の準備をしていた。

- (8)² 5時ごろは、ジョンが音楽会の準備をしていた。
 (8)³ 公会堂では、ジョンが音楽会の準備をしていた。
 (12) b¹. 教室には田中がいる。

以上は一般的な主題化変形である。「～は」が「～について言えば」と言い換えられることから、前提でもあると言えよう。しかし、本稿の対象である「は」文、つまり(1c)、(1d)と(2c)、(2d)、それに(15)のような主語名詞句は特に他の例と異なるニュアンスがある。というのは、一方で文における格関係は意味解釈から、いつもそう単純に配列するわけではない。他方には、以上のような文法関係だけをとらえた格の取り扱いで意味解釈ができるのかどうかという問題があるからである。

主題化変形は、日本語によく使われる変形である。これによって、主題化される要素は、話者と聴者の間で了解されている「古い情報」でなければならない。例えば、(1d)と(16)は、「本」が主題化されているが、「本」について、すでに前に述べられているか、文脈によって判断されて、話者と聴者の間で了解事項になっていなければならない。

そこで再び例(4)と(5)を(21)、(22)のように分解してみる。

- (21) a. 昔昔、山の中におじいさんとおばあさんが住んでいました。
 b. おじいさんとおばあさんはうちでかさを作っていました。…
 c. おじいさんはかさを持って、町に売りに行きました。
 (22) a. 北の国の年をとった漁師が冬に海を見たいと5人の子どもに頼む。
 b. 上の4人の息子は、いろいろな方法で海を見せようとするが、失敗した。
 c. 一番下の娘は、凍った海を前にして…。

(21b)、(21c)、(22b)、(22c)はともに「は」文であり、それぞれ(21a)と(22a)を前提とすることが明らかである。統語上の句構造は、S → NP VPの規則にあたるが、意味レベルではすでに文を超えて、先行の文脈を考えないと捉えられないのである。

これについて井上(1976)では「拡大標準理論のわく内では、格関係が変形にたいする条件として働くことが多い。また、格関係以外に変形の原因になったり、文の文法性を左右する意味情報がある」とし、またそのひとつになる「前提」の問題については「標準理論の深層構造では決定できない意味があることを示しているのである。」²⁴⁾としてきた。

つまり、例文(21)では、(21b)「おじいさんとおばあさんはうちでかさを作っていました」は、(21a)の「昔昔、山の中におじいさんとおばあさんが住んでいました」ことを前提とし、「なにかをする」が焦点になっている。そして、焦点の位置に新しい情報を与える要素を置かなければならない。

このように、「前提」と「焦点」、「古い情報」と「新しい情報」のような意味情報が、変形を制約したり、文法性を左右したりする。「は」文の前提は、その文の枠以外の、文の文法性を左右する意味情報にあるわけで、形式文法からはみ出された意味関係の取り扱いである。それで存在文型を考えると、文型(ii)の「N₁はN₂にV」において、その前提は文型(i)

の「 N_2 に N_1 が V 」のところから求めなければならない。主語名詞句の「は」文は外部要素による主題化変形文として位置づけてもよからうかと考えられる。

4. 「が」文と「は」文の関連

以上、「が」文と「は」文の前提を考察しながら、「が」文と「は」文の関連をおおまかに議論してきた。考察を簡単にまとめておくと、次のようなことがいえる。

S_1 （「が」文）と S_2 （「は」文）はともに何かの前提に基づいて展開する。ただし、 S_1 の場合はその前提が S_1 文の中に埋め込まれているのに対して、 S_2 は先行の文脈か、前の文にある要素が前提となるのである。 S_1 の前提は内在性格だとすれば、 S_2 の前提は外在要素の投射としてもいい。 S_1 は、その内在の前提をもとに新情報を取り出す。その一方、それを前提に、 S_2 はさらなる展開を繰り返していく。この場合、 S_2 における構成素がさらに新たな前提となりうる。日本語の文はこのような循環性に従って展開していくように思われる。したがって、「は」文を「が」文の内部からの「取り出し」文とみていい。

これにより、文型(i)と文型(ii)をみれば、その関連が次のようになる。

文型(i)は「 N_2 に」が前提となって、「 N_1 が」を取り出して文を展開していく。さらに「 N_2 に N_1 が V 」の各要素を前提に、文型(ii)の方は、文型(i)における要素を「 N_1 は」として取り上げ、「 N_2 に V 」と展開していく。つまり、名詞句が文中に、又は文を超えて、互いに関連しながら、文型の意味づけに関与し、さらに V の意味づけにもかかわっていく。

したがって、文型(i)と文型(ii)を導入する際、文型(ii)は文型(i)の内容に基づいてとりあげるべきである。

5. おわりに

以上のような考察から、存在文型といえども、名詞句が文型の意味づけへの関与度がかなり高く、文型(i)と文型(ii)は単なる動詞の「存在」という意味との必然的な関係が見えなく、意味と V の形式の密接な関係も反映されていないと思われる。存在文型の指導にあたり、 V が「存在」であるか否かの着眼よりも、文型(ii)の「 N_1 は N_2 に V 」を文型(i)の「 N_2 に N_1 が V 」からの「取り出し」文として取り扱い、二つの文型を継続的、有機的に「使いまわす」ことで理解の糸口を提供するという指導が大切なのであろうとも考えられる。

例えば、例文(1)(2)を、次のような順序で提出していくとよい。

(1) a. 事務所に田中さんがいます。

b. 事務所に木村さんがいます。

.....

事務所に.....N(誰か)がいます。

これに基づいて、中から関連のある誰か<既出物>を取り上げるとして、次の文型に移す。

- c. 田中さんは事務所にあります。
- d. 木村さんは事務所にあります。
- ………N <既出物>は事務所にあります。

(2) a. 机の上に写真があります。

- b. 机の上に本があります。
- ………
- 机の上に………N (何か) があります。

- c. 本は机の上にあります。
- d. 写真は机の上にあります。
- ………N <既出物>は机の上にあります。

以上のような導入では、Vはただ存在動詞の「ある／いる」を代入するものとする。そして、名詞句の組み合わせに従って「ある／いる」の意味区分にタッチしていく。

このように「が」文と「は」文の関連づけを考慮しながら、文型(i)と文型(ii)を導入すれば、文型の習得により有効であるとともに、「が」と「は」の使い分けの理解にも一助になると考えられる。

【注】

- 1) 杉本つとむ＝岩淵匡編『新版日本語学辞典』(おうふう・1994年)125頁を参照。
- 2) 例えば、<学生が教科書を読む>という文は、<体言_ガ体言_ヲ動詞>という文型(即ち構造的な意味での枠)に属し、各体言、動詞に<学生、教科書、読む>という語彙を代入して得られたものだととらえることができる。(杉本他・前掲注1)125頁を参照。
- 3) a『新日本語の基礎I』(スリーエーネットワーク・1990年)78頁を参照。
b『みんなの日本語I』(スリーエーネットワーク・2002年)80頁を参照。
- 4) 前掲注3・78頁以下を参照。
- 5) 「従来の文型研究では、名詞句の振るまいについて軽視する傾向があった。」(杉本他・前掲注1・149頁を参照。)との指摘があるように、存在文型も単なる動詞の意味合いで固定的に捉えていることがほとんどで、文型に対する名詞句の働き、さらに文を超える意味づけの要素および伝達上の内容も含めた総合的観点など、もっと動的なものとしてとらえた研究がすすめられていく必要がある。
- 6) 井上和子著『変形文法と日本語(上)』(大修館書店・1976年)175頁以下を参照。井上(1976)では、変形は機能から考えておよそ削除変形、付加変形、移動変形という三種類に分けられるとし、日本語の移動変形として、名詞句の順序を変える「かきませ変形」、主題化変形、分裂文変形ぐらいのものであるとしている。ここの例は「かきませ変形」にあたる。
- 7) 池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』(大修館書店・1981年)69頁以下を参照。池上嘉彦によれば、言語には「HAVE言語」(所有を表す語のある言語)と「BE言語」(所有を表すのに存在の表現を用いる言語)との二つがあり、日本語は本来「BE言語」に属するという指摘がある。また、変形文法では、there is / are構文(存在文)とhave構文(所有文)とは同一の基底構造から生成されるとの主張もある。

- 8) 日本語の文は平板な構造をしており、動詞句という節点はないとする非階層的構造 (nonconfigurational structure) という分析の方もあるが、言語の階層性という一般化の特徴のことから、本稿ではそれに従わない。
- 9) それ以外に、また「場所を表わす<結婚式場>と出来事を表わす<結婚式>とはともに動詞<ある>と結び付くが、それぞれ別の文型に現われ、時制上の意味も異なる。つまり<駅前に結婚式場がある>と<あした、駅前の結婚式場で友人の結婚式がある>のようである。」(杉本他・前掲注1・149頁)とあるが、本稿では、その事態発生のような意味の「ある」を存在文型の問題外とする。
- 10) 日本語では、「助詞」など歴然とした成分の形式標識があり、文型とは、形式標識の組み合わせによる型である。それに対し、中国語では文の成分に日本語のような形式標識が乏しいため、文型については動詞の意味合いによって決められることが多いと考えられる。
- 11) これまでの研究では、「は」文を主題文と呼ぶこともあるが、変形記述では、助詞は変形によって、後に挿入される(前掲注6・41頁以下を参照)としていることから、必要なところを除き、特にこの用語を使わない。
- 12) 『初級日本語げんき I』(外語訳研究出版社・2000年) 303頁を参照。
- 13) <http://www.nhk.or.jp/wakarukokugo20.html>NHK わかる国語大好きな20冊を参照。
- 14) 「は」と「が」の使い分けを説明するために従来の研究でとりあげられた主な観点は大きく、(ア)ガ格の情報性——新情報にはガ、旧情報にはハ、(イ)文の種類——現象文にはガ、判断文にはハ、(ウ)ガ格の係りかた——文末に係るときはハ、文末まで係らないときはガ、(エ)ガ格のとりたてかた——対比的なときはハ、排他的なときはガ、といったような4つに分類できる。いずれも、一文そのものに限って「は」と「が」の使い分けに主眼を置いた議論である。
- 15) 井上和子著『変形文法と日本語(下)』(大修館書店・1976年) 5頁以下を参照。
- 16) 前掲注15を参照。
- 17) 前掲注15・7頁を参照。
- 18) 前掲注15・8頁を参照。
- 19) 郡司隆男著『単語と文の構造』(岩波書店・2002年) 補遺Bを参照。
- 20) 詳しくは前掲注19・142頁以下を参照。
- 21) C統御(c-command)とは、構成素統御。構文木における二つの節点間の関係の一つで、次の場合、 α は β をc統御する:(i) α も β も互いに支配せず、(ii) α を支配する最初の枝分かれ節点が β を支配する。例えば、他動詞は直接目的語をc統御するが、間接目的語や主語、修飾語はc統御しない。代名詞、再帰代名詞、相互指示代名詞、普通名詞句、空範疇の同一性を決定するための束縛理論(binding theory)などで使われる。
- 22) 前掲注19・142頁を参照。
- 23) ここで前掲注6・174頁の例を引用する。
- 24) 前掲注6・xxxii頁以下を参照。

【参考文献】

- ① 井上和子著『変形文法と日本語(上)』(大修館書店・1976年)
- ② 井上和子著『変形文法と日本語(下)』(大修館書店・1976年)
- ③ 池上嘉彦著『「する」と「なる」の言語学』(大修館書店・1981年)
- ④ 久野暁著『日本文法研究』(大修館書店・1973年)
- ⑤ 郡司隆男著『単語と文の構造』(岩波書店・2002年)
- ⑥ 杉本つとむ・岩淵匡編『新版 日本語学辞典』(おうふう・1994年)